


# 六花

A white crane stands on a reed in a pond at night. The background is dark blue with a full yellow moon and several stars. Snowflakes are scattered throughout the scene. The crane is the central focus, with its long neck curved. The reed it stands on is thin and vertical. The pond is dark with some light reflections. The overall mood is serene and quiet.

俳句雜誌りつか

2014 (平成26年)

cover design Yuna Mizuno

8

しん  
親

なぐさ  
七種は知の滝

山田六甲

青茅の照り返したる絵天井  
湖南へと走れる梅雨のさざなみは  
空の闇みづうみの闇蛙鳴く  
湖のほか出でざる船に遊びけり  
堂涼しお灸のごとく近江富士  
股覗きせよと堅田の新松子  
空梅雨や句碑の台座を藻が洗ひ  
五月雨の手摺にほこり浮御堂  
靴脱いでたちまち涼し浮御堂  
焼鮎のながみ走りし串のかほ  
焼鮎に炎吐かれし口の中  
夕虹や湖の明るさ天にあり  
ぬれ枝に張り直しある蜘蛛の糸  
暑に負けず龜といふ字を楽しめり  
比良山を風すべりくる鮎の宿

義仲寺翁堂伊藤若冲画

堅田・浮御堂

青墨の色して海の日の阿波路

淡路島

海の日  
の鵜が来て羽を広げたる  
大暑かなめくればぼろと酸性紙  
口八丁手八丁にて蛸をくふ

山ミツさんより蛸

むせにけり薔薇のかをりの蚊遣香  
ふつふつと峰雲と句の治まらず  
長草のひれ伏しもせず滝の風

七種の滝

滝道や下りるときにも足をあげ  
滝壺に散骨をして帰りけり  
滝高みわれに翼を与へけり  
細々と滝の面目たててをり  
舐していづこの方に滝のある  
滝壺は滝を鍛へてをりにけり  
滝水に剪りたる枝を洗ひけり  
合歡よりも嬰のこ毛の

有馬鼓ヶ滝

万年青さんへ椿の杖

やはらかき 住田さん初孫

梵鐘の獅子の浮彫みどりさす  
行在所跡に玉解く芭蕉かな  
巢に戻る夕日の中の親燕  
船笛に押され茅の輪をくぐりけり  
うみかぜに香魚の串を抜きにけり  
箸先にほぐせる鮎の艶めきぬ  
夏つばめひるがへりては湖ひろく  
若かりし母と私に湖の虹  
夕虹や湖族の郷に踏み入らば  
夕虹の空のいろして果てにけり

扇風機別の顔して止まりけり

具森 光洋

満開の桜に嫉妬する 齡

田植機にお神酒吞ませてから仕舞う

子どもの日父にはまだまだ腕相撲

昼寝せし無心の顔を見てしまふ

扇風機別の顔して止まりけり

せんぶうきべつのかおしてとまりけり かいもり こうよう

もう読み尽くされたと思つていた扇風機俳句の盲点を突かれた。取り合わせをしなくても、まだまだ俳句の可能性を限りなく感じさせてくれる作品。

このように指摘されると、はて扇風機が働いているときはどんな顔をしていたのだろう、と読者は想像力を掻き立てられる。光洋一流の軽みと滑稽の上に、味わいが加わった。扇風機が回っているときには「汗だくの顔でけつばってる！」という答えを裏側に仕込んであるにちがいない。

働き終わった扇風機を団扇であおぎながらねぎらつてあげよう。覚えやすさも一等で、扇風機を止めるたびに、この句が口について出るだろう。別の顔とは、泣き顔か、笑顔か、渋い顔か、怖い顔か、すました顔か、アンパンマンのような顔か……。

# 雪卿集

磯なげき

佐津のぼる

船笛も志摩の岬に聞かばこそ  
船笛のあとをひきつぎ磯なげき  
ちぎれ藻を吐き出す春の荒磯かな  
風光る神の定めし位置に島  
春風や屋根に石置く岬ぐらし

菊若葉

志方章子

うららかや人参に髭伸びてをり  
水桶に春セーダーの青揺るる  
四月来ぬ二円切手の白兎  
うららかや松ぼつくりの木馬の目  
麗かや雑草事典持ち歩く

# 雪卿集

藤

永田万年青

人の顔隠してをりぬ藤の花  
山裾のぽんやりとして藤の花  
夏山の奥へ行くほど色増せり  
藤棚の椅子に寝転び迎へ待つ  
藤波をしぼし見つめて眠りけり

桐の花

松本文一郎

どなたかと日傘の女を追ひ越しぬ  
桐の花娘が居ても居なくても  
故郷の花いちもんめ卯木咲く  
草笛や雲の流るる古戦場  
廃校の決まりし校舎夕蛙

# 雪卿集

嫉妬する

貝森

光洋

満開の桜に嫉妬する齡  
田植機にお神酒吞ませてから仕舞う  
子どもの日父にはまだまだ腕相撲  
昼寝せし無心の顔を見てしまふ  
扇風機別の顔して止まりけり

わくらば

出口

誠

鯉幟工家の家に立つてをり  
編隊の迫り来たりて風青し  
ヘリコプター八機編隊風青し  
病葉にわづかの緑残りけり  
隙突ついてかたばみの花屋根にあり



# 雪樹集

馬冷す

田尻 勝子

短夜や句帳携帯電子辞書  
新樹光3Dプリンター始動  
馬冷す遠野の里の河童淵  
牡丹の色の色々蕊は金  
畑より西瓜ほいほい荷台まで

青 鷺

筒井八重子

明石城青葉若葉に日の光  
葉桜の道をたどりて初夏の風  
青鷺の羽ばたく行方たどりけり  
青葉の城さがせど友の見つからず  
若葉して人出の多い明石城

# 蛩雪譚

六甲選

道といふ字は蝸牛に似てをる。

二十六年八月号鑑賞

梵鐘の獅子の浮彫みどりさす 笹村 政子

七月から政子は「雪嶺抄」作家となった。だから十句を毎月発表することになったので、気構えをして作品に取り組むことになろう。だが、気構えというのは私の狙っているところでもなく政子にはゆったりと自分の良さ、つまり楽しみながら創って欲しいのである。どういふところを良しとするかは今後少しずつ述べていきたい。さてこの作品は獅子を浮き彫りにした梵鐘を詠んだ。梵鐘そのものが銅で出来ているのだから緑青が吹いて緑色になってくるのは当然だが、その緑色にさらに梢のひかりによつてさらに鮮やかな緑色に染まっている。従つて音色も清浄な音色であろうことは容易に想像出来る。私の見た梵鐘は天女の舞っている姿であつたが一面だけを見たのかも知れぬ。少し調べて見ると「縦横に帯状の線で区切られていて一番広い部分を池の間（池の町）」と言い通常同じ絵柄の天人が入るが注文をする寺によつて僧侶の好みも反映する」のだとか。梵鐘は、通常、口径1尺8寸以上のものをいうらしく、それより小型のものを半鐘というのだそうだ。（別な説もあるが……）。鐘だけでも奥が深い。掲句「みどりさす」という季語がうまく働いている。今後、こうした静謐な作品を重ねて行くことを期待したい。なお初心者基礎句会でも先月から指導をしてもらっている。人を教えることが一番の勉強である。

# 六花集

鳧用燕芍夏  
 鳴水の葉兆  
 くにのやす  
 や沿巢酒釣  
 やひ田屋舟  
 大し舎のず  
 潮れん食木っ  
 のげ田堂戸と  
 夜の踏大少動  
 の深みはしか  
 まちはや開ざ  
 りんや開ざ  
 てこりきる

廣畑育子

筍来遊勞芽  
 のたぶひ楓  
 の道野のの  
 裂をに目折  
 目戻めをり  
 にれくも鶴  
 ぼりて広  
 土土て雛げ  
 の筆ををゐ  
 食長り納た  
 込けぬめる  
 て紙けか  
 めを芝けり  
 るり居りな

住田千代子

新石切春蒼  
 緑庭羽昼天  
 やのへのに  
 空借と琴色  
 に景続の奪  
 鴟のるしは  
 尾山道たれ  
 おかのるし  
 くすお路桜  
 東みろ地か  
 大けなるもか  
 寺りる奥な

平居滯子